

## 【vol.67】空気の読み方について ～その4～テンションまとめとアウフタクト

どうも、大沼です。

前回までで、メジャーキーのダイアトニックコードの中に、9th、11th、13thの3つのテンションが入れられる(使える)場所を全て学びましたね。

今回はそれらのまとめとして、実戦譜例を1つやっていきたいと思います。

これまで学んできた事を出来るだけ入れた譜例にしてあるので、そのまま弾いても良いですし、ソロの練習用にバックギグにしても、自分なりにアレンジしてもらっても、どの様にも使えるはずですよ。

後は、プレイを高度に聴かせる要素として、『フレーズの譜割』と『インターバルを広く取る』とありましたが、この『フレーズの譜割』に入っていきます。

まずは基本の『アウフタクト』から行きましょう。

それでは、やっていきましょうか。

まずは、ここ3回ほどのテキストで学んでいた、9th、11th、13thのテンションを使った実戦譜例です。

コード進行は、Vol.65 でやったkey=Cのダイアトニックコードを全て使った進行をベースにしてあります。

これまで載せてきた譜例では、リード(ソロ)系のプレイが多かったので、今回はソロギター(コードアルペジオ)系の譜例にしてみました。

この手のコードアルペジオ系のプレイは、伸ばす音(特にベース音)をどこまで伸ばすのか？が非常に大事です。

タブ譜だけではなく、五線譜の方もよく見て、どの音がどこまで伸びているのかに気をつけて弾きましょう。

全ての部分で、そうしなければいけないわけではないのですが、ベース音が途切れると、

一気に演奏全体が軽くなってしまいます。

(※試しにアルペジオの最中に、ベース音を適当なところで切ってみるとわかります)

後は、一応、譜割をつけていますが、リズムを一定に保ち続ける、と言うよりは、フリーテンポでゆったりと弾くようなイメージで作りました。

(※実際に弾く場合の基本テンポとしてはBPM=90前後を想定しています)

適当な箇所にタメを作ったりしても良い感じになると思うので、1音1音、自分が鳴らしている音をよく聴きながら、じっくり、ゆったりと弾いてください。

ちなみに、テンションには「その音が進みたがっている(解決したくなる)方向」があるのですが、この譜例では「これまで覚えたものを出来るだけ使う」と言う事に重点を置いています。(※一応、それもある程度は考えて作っていますが)

それと、過去のテキストではやっていないコードや、クロマチック・アプローチ(半音で次の(目的の)音に接する)も少し出てきていますが、特に深く考えずに「こんな弾き方もあるんだな」程度でいいので、気楽に取り組んでください。

それでは譜例は以下になります。

### 譜例1、ソロギター風、各テンションまとめ(9th、11th、13th)

The image shows a musical score for a solo guitar piece. It is in 4/4 time and features a key signature of one sharp (F#). The score is divided into two systems. The first system (measures 1-4) starts with a CM7(13) chord and an FM9 chord. The second system (measures 5-8) includes Em7, Em7/B, and Am9 chords. The score includes a treble clef, a key signature of one sharp (F#), and a dynamic marking of 'mf'. The guitar part is shown with a standard six-string guitar layout. The first system covers measures 1-4, and the second system covers measures 5-8. The first system starts with a CM7(13) chord and an FM9 chord. The second system includes Em7, Em7/B, and Am9 chords.

The image shows a guitar score with two systems. The first system (measures 9-12) features chords Bm7(b5), Am7, Am9, G/A, and Am7. The second system (measures 13-17) features chords Dm11, G7(13), G7(b13), and CM9. Each system includes a treble clef staff with notes and a tablature staff with fret numbers.

進行的には延々とループできるようにしてあるので、  
慣れてきたら自分なりに自由にパターンを作ってみても良いですね。

後はこのコード進行をバックングとして録音して、テンションを使ったリードプレイの練習用トラックにも使えますので、色々と試してみてください。

その時は、どのコードにどのテンションが使えるのか？、そのテンションを鳴らすとどんな感じ(雰囲気)になるのか？を意識しながら、自分なりのプレイ理論を考えてみましょう。

と、言う事で、テンションについては以上です。

簡単にまとめてしまえば、そのテンションを「使えるところ」と、その音を「使った感じ」を基本に、「今、そのプレイはアリかナシか」を決めていく、という事になります。

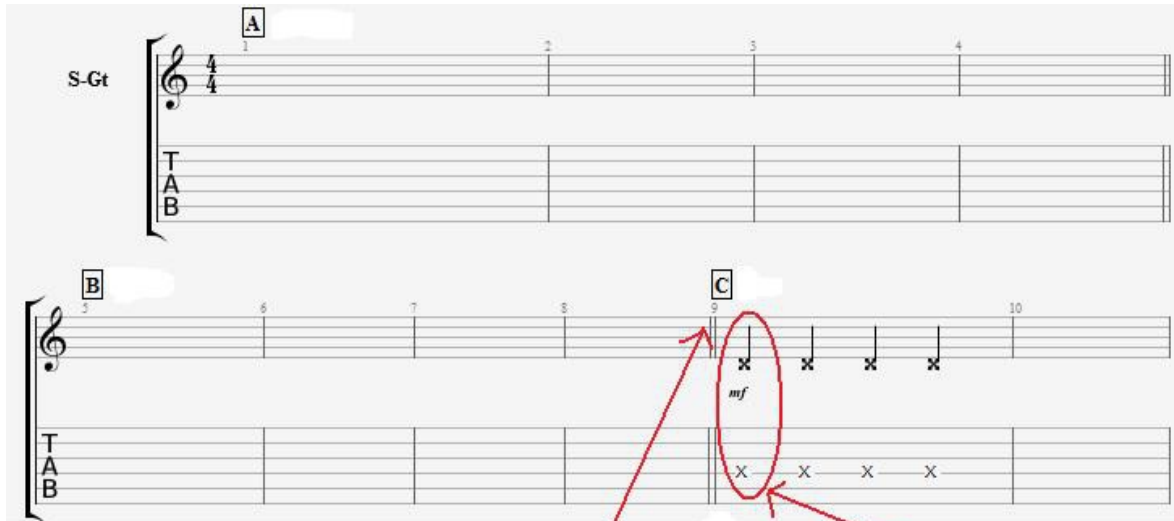
さて、テンションだけで結構な量になってしまいましたが、  
高度寄りなプレイの要素としては後2つ、『フレーズの譜割を意識する事』と『インターバルを広く取る事』が残っています。

次は『フレーズの譜割を意識する事』について見ていきましょう。

まず、譜割の観点から「弾いているフレーズを高度に聞かせる方法」として最初に思いつくのが、『フレーズの譜割を複雑にする』と言う事だと思います。

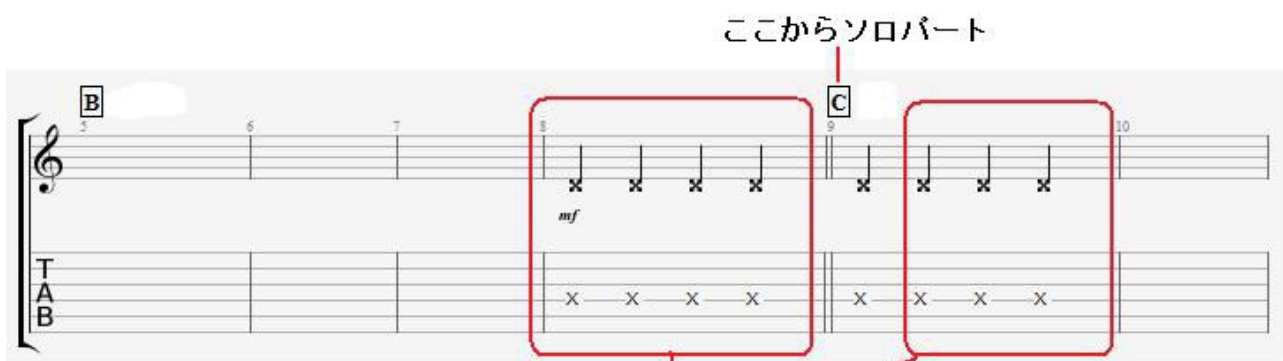
ですがその前に、基本的な観点としては『フレーズを弾き始める位置』が、重要な1つのポイントになっています。

vol.65でも少し書いたのですが、1、2、3、4とビートがある中で、例えば「1」のド頭から弾き始めると、よく言えばシンプル、悪く言えば幼稚です。



ここからギターソロの場合、1拍目のアタマから弾き出すと、良く言えばシンプルに聴こえる(シンプルな表現法)、悪く言えば幼稚に聴こえる(単純すぎる表現法)

この位置から弾き始めるのが「悪い」と言うわけではないのですが、大方、ソロパートに入る場合は、その前後から始めるのが自然な場合が多いです。(※もちろん曲調やプレイの意図、前後関係にもよりますが)



前後関係にもよるが、この赤枠内のどこから入るのが自然な事が多い。

この様な、フレーズ(や楽曲そのもの)が、第1拍目以外の場所から開始する事を、音楽用語で『アウフタクト』、日本語では『弱起(じゃっき)』と言います。

「アウフタクト」はドイツ語なのですが、大本の言葉の意味を調べてみたところ、「開始」とか「幕開け」、「前触れ」と言う意味のようです。

ではなぜ、日本語では「弱起」と、「弱い」という文字が入るのかと言うと、それはリズムの中の強拍、弱拍の関係性が元ですね。

例えば、各リズム(やビート)の強弱の関係性を表すと、以下のように強拍と弱拍に分類されます。

The image shows three examples of musical notation on a staff with a treble clef and a dynamic marking of *mf*. The first example is labeled '1小節内(4分音符)なら' and shows four quarter notes with stems pointing down, labeled '強 弱 中強 弱'. The second example is labeled '8分音符なら' and shows two eighth notes with stems pointing down, labeled '強 弱'. The third example is labeled '16分音符なら' and shows four sixteenth notes with stems pointing down, labeled '強 弱 中強 弱'. A vertical label 'TAB' is on the left side of the first example.

この分類の、(一番強い、アタマの強拍と比べて)弱い拍(弱拍)のどれかからフレーズが起こる(始める)ので、「弱起」と呼ぶわけですね。  
(※中強拍も事実上、弱拍と見て良いと思います)

ちなみにこの「強拍、弱拍」の「強、弱」という言葉は、必ずしも音量の大小を意味しているわけでは無いので注意しましょう。

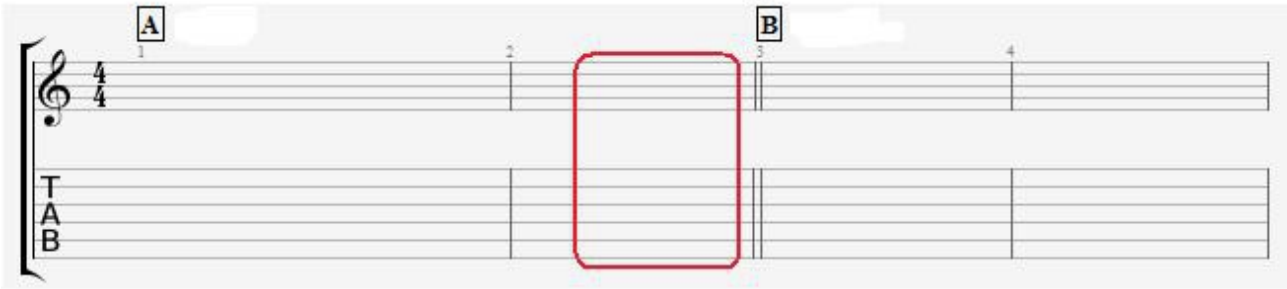
誤解を恐れずに言ってしまうと、人間が音楽を聴いていて、リズムの区切りが良い箇所、最初(アタマ)の方になる音を、そのリズムの基準の様に感じている、と言う意味で「強弱」と分類している感じです。

さて、実は、過去のテキストに載せてきたリードプレイの譜例なのですが、多くのフレーズがアウフタクトで始まっていたりします。

これは、意図的にそうやっていた面もあるのですが、「その方が(実際のプレイとしては)自然だから」と言う部分も多々あります。

例えば歌モノの楽曲で、「サビが終わって次のパートはギターソロ」みたいな展開の場合、基本的にはアウフタクトで始めるのが普通です。(※前後関係やアレンジにもよります)

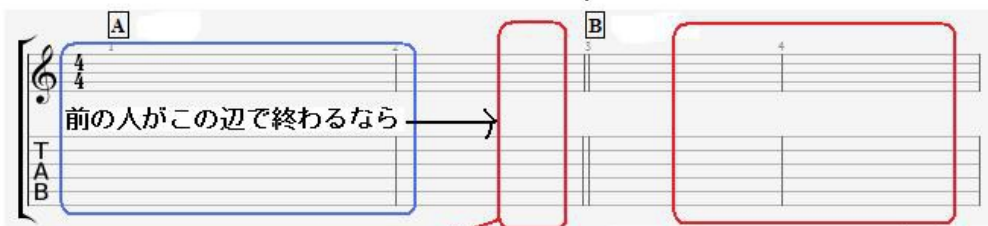
サビ → ソロ →



大体ここらへんから弾き始める(事が多い)

後は、セッションなどでソロ回しをする場合は、自分の前に演奏している人の、プレイが終わるタイミングに合わせて、自分が入る場所を判断したりします。

前の人 → 自分 →



前の人が早めに終わって、十分な間があるならこの辺りから入っても大丈夫。

セッションのソロ回しの場合は、前の人が終わってから間を置いて、この辺りから入った方が安全。

(※歌モノでも、少し待ってから(右の赤枠位の位置で)入った方が良いときもあります)

こういう時は、大方、弱拍から入る事になりますし、メロディー(パート)同士のつながりや、切り替わり、もしくは引継ぎの感じが出るので、その方が自然です。

もちろん、ド頭の強拍から入るのが悪いわけでは無いですし、そうした方が良くもあるので、結局は状況によりますね。

この辺りは、様々な曲を聴いて研究したり、普段の練習で自分なりに色々と試したりして、感覚を鍛えておきましょう。

と、言う事で、今回は以上になります。

テンションに関しては、とにかく色々と試してみて、感覚を身につける、と言うのが基本です。

僕がこの講座で良く言う、「音楽を分析する」というのは、  
例えばこういったテンションの知識などを、キチンと使える様になる為に、  
必要な能力です。

奏法ロジックを頭で理解しただけでは、多くの場合、さじ加減がまだ掴めていないので、  
上手いプレイヤーの演奏を分析して、それを自分に取り込んでいくのです。

譜割についても、今回は基本中の基本であるアウフタクトについてお話しましたが、  
世の楽曲を聴いてみると、多くがそうなっている事がわかると思います。

過去のテキストで載せた譜例も、強拍からは始めていないフレーズが  
結構あるはずなので、もう一度復習がてらやってみてください。

では、次回に続きます。

ありがとうございました。

大沼